イタリア旅行と苦い恋の物語
――3つのイギリス短編小説をめぐって――

谷　本　佳　子

I

George Eliot の *Middlemarch*（1871-72）、George Gissing の *The Emancipated*（1890）、E. M. Forster の *Where Angels Fear to Tread*（1905）と *A Room with a View*（1908）、そして D. H. Lawrence の *The Lost Girl*（1920）は、その舞台にイタリアが登場する長編小説である。これらの作品において、イギリス人の女性たちがイタリアを訪れ、イタリアから影響を受ける様は印象的である。*Middlemarch* におけるイタリアは、理想主義が生む幻想から現実へと目覚めるきっかけをドロシア（Dorothea）に与えたが、*The Emancipated* では、“Its foreign aspect, its brightness, its comfort, the view from the windows”（*E* 203）などといったイタリアの土地の魅力が、頑迷なピューリタンであるミリアム（Miriam）に、自身の宗教的偽善性を認識させた。また、*Where Angels Fear to Tread* のカロライン（Caroline）と *A Room with a View* のルーシー（Lucy）は、イタリアで、階級性に縛られる自国の因習的で偽善的な価値観を捨てて自分の感情に正直になることを学ぶ。この四人のイギリス人女性たちは、イタリア旅行を経験することによって精神的に解放されるのだが、このような共通した展開の背景には、作品が書かれたヴィクトリア朝からエドワード朝のイギリスにおけるイタリアに対する共通認識がある。つまり、当時のイギリス人は、より南方に位置するイタリアに、自国での抑圧からの解放を期待していたのである。

もちろん、イタリアにおいて精神的に解放されることによって、その後の人生が好転する例ばかりではない。*The Emancipated* のセシリー（Cecily）や *Where Angels Fear to Tread* のリリア（Lilia）は、イタリアでのぼせあがり、性急に間違った結婚をしたことで不幸になる。また、イタリア人男性と結婚して自国を離れ、生活の場をイタリアに移した *The Lost Girl* のアルヴァイナ（Alvina）の場合は、愛のある結婚はしたものの、妊娠中に夫が出征して、一人イタリアに取り残されるという結末を迎える。イタリアと解放のイメージを結び付けて考えた場合、プラスの面ばかりが強調されがちではあるが、そればかりではないことも改めて念頭に置いておく必要があるだろう[1]。

イタリアが扱われている作品には、もちろん短編小説もある。例えば、ギッシングの "The Ring Finger"（1898）[2] と H. G. Wells の "Miss Winchelsea's Heart"（1898）は、偶然にも同じ年に出版されているが、どちらの作品の舞台にもローマが登場する。この二作品では、イギリス人の女性がローマ、またはローマへ向かう道中で出会ったイギリス人の男性に恋をするが、皮肉なことに、結果的にはどちらの恋も実らずに終わる。どことなく「フォースターっぽさ」が感じられるこの二作品においても、その根底にはイタリアと解放のイメージが潜んではいるが、両作品をより魅力的なものにしているのは、むしろ意外性のある結末である。本論文では、"The Ring Finger"、"Miss Winchelsea's Heart"、そしてフォースターの "The Eternal Moment"（1905）[3] を取り上げ、三作品の中に描かれるイタリアでの苦い恋の物語について論じる。

---

1 拙論文「*Middlemarch* から *The Lost Girl* へ―イタリアと、解放されたイギリス人のヒロインたち―」において、*Middlemarch*、*The Emancipated*、*Where Angels Fear to Tread*、*A Room with a View*、*The Lost Girl* の細かな比較を行っている。

2 "The Ring Finger" については、拙論文「ジョージ・ギッシングの短編小説「くすり指」―女とイタリアと、男―」において詳細に論じている。

3 "The Eternal Moment" については、拙論文「"The Eternal Moment" における過去と現在」でも論じている。

Ⅱ

“The Ring Finger” では、イングランド出身のライトン（Wrighton）と、北アイルランド出身のミス・ケリン（Miss Kerin）がローマのホテルで出会う。ライトンは病気の療養のためにイタリアに冬の間滞在しており、ミス・ケリンは伯父と旅行中だが、伯父がインフルエンザで寝込んだことをきっかけとして、二人は連れ立って観光に出かけるようになる。6週間前に結婚のプロポーズの手紙をイギリスに送ったライトンは、その手紙の返事を待っているところであり、彼にとってミス・ケリンと一緒に過ごすことは単なる暇つぶしでしかない。しかし、そんな事情を知らないミス・ケリンは、ライトンとの交流を通して彼に恋をするのである。

ある日、ミス・ケリンは、ライトンの足下に落ちていた10フラン金貨を拾おうとして、あやまって彼に思い切り指を踏まれるのだが、彼が思わずひどく傷つけてしまったのは、彼女の左手のくすり指だった。ライトンはお詫びのつもりでミス・ケリンを庭園見学に誘うが、彼女はこの誘いを、彼が自分に好意を抱いてくれている証拠と解釈し、快諾する。そして、彼に踏まれて傷ついたのがくすり指、つまり結婚指輪をはめる指であることにも特別な意味合いを見出そうとするのである。

そんな折、ライトンはプロポーズについて期待通りの返事を受け取って有頂天になり、庭園見学の際に、自分の結婚についてミス・ケリンに話す。ミス・ケリンは、ショックを受けながらも、冷静な態度でお祝いの言葉を述べ、さらにライトンにくすり指を踏みつけられたときに拾った金貨を、婚約指輪を購入する際に使ってほしいと申し出る。そんな彼女に対して「新たな親愛の情」（*RF* 220）を感じたライトンは、申し出通りにすると約束して、金貨を受け取るのである。

数日後、ミス・ケリンはライトンに別れを告げずに、伯父と共にローマを去るが、自分のことで頭がいっぱいのライトンは、彼女がいないことにすぐには気付かない。ライトンはミス・ケリンを、常々「とても落

ち着いている、かなりしっかりした若い女性」（*RF* 206）だと思っており、60 歳の女性がそばにいるのと同じように、彼女に対してときめきを感じたことはなかった。しかしながら、庭園の場面で手紙のことを話そうとしたとき、ミス・ケリンの「何とも奇妙な、おびえたような」（*RF* 218）眼差しを見た彼は、初めて彼女のことを「60 歳の女性」ではなく、「自分よりも若い一人の女性、自分がこれまで支配されていたのと同じ感情を抱くことのできる一人の女性」と感じ（*RF* 218）、自分の態度に軽率なところがあったのではないかと思った。だが、最後の場面では、自分がミス・ケリンに愛されたと考えるのは、勝手な思い上がりであり、馬鹿な妄想だと考えようとするのである。

Ⅲ

“Miss Winchelsea’s Heart” では、ミス・ウィンチェルシー（Miss Winchelsea）が女友達二人と共にローマへ向かう旅の途中にイギリス人の青年と出会う。ミス・ウィンチェルシーとその青年は意気投合し、恋愛に発展しそうな雰囲気になり、彼はローマで、ミス・ウィンチェルシーに愛の告白をしようとするが、その時、青年の友人が現れ、彼の名前を呼ぶ。ミス・ウィンチェルシーは旅の途中、誰かが「スヌークス」（Snooks）と呼んでいるのを聞き、親指を鼻先にあてて手を広げる軽蔑のしぐさを意味するこの名前を嫌悪していたが、それまで知る機会がなかったその青年の名字こそがスヌークスだったのだ。ミス・ウィンチェルシーは彼を愛しながらも、その名前の持つ強烈なイメージに打ちのめされ、また自分がスヌークス夫人になることをどうしても受け入れることができず、彼に本当の理由を明かすこともできないまま、彼の愛を退けてしまう。

> From the moment that it first rang upon her ears, the dream of her happiness was prostrate in the dust. All the refinement she had figured was

ruined and defaced by the cognomen's inexorable vulgarity.（*MWH* 156）

彼女のイタリアにおけるロマンスはここで終わってしまうように一瞬思われるが、実際はそうではない。

一緒に旅行中の女友達の一人であるファニー（Fanny）が、ミス・ウィンチェルシーとスヌークス氏の取り次ぎ役として二人の間に入ったことがきっかけとなり、結果的にスヌークス氏はファニーに恋をして、二人は結婚する。ミス・ウィンチェルシーは自分の方が友人二人よりも教養があると自負し、二人を見下しているようなところがあった。したがって、かつて自分を愛したスヌークス氏が、自分ではなくファニーを選んだことを許せない気持ちになっていた。しかも、結婚に際して、ファニーが彼の名前に関する問題点を正直に話したことで、スヌークス氏が "Snooks" から "Senoks" または "Se'noks" に綴りを変更することを了承してくれたと聞き、彼を受け入れられない唯一の理由がその名前だったミス・ウィンチェルシーは、怒りとくやしさで苦しむ。

ミス・ウィンチェルシーはこの感情を引きずり続け、二人の結婚から 2 年後に、彼が自分ではなくファニーを妻に選んだことを後悔していることを期待して、二人の家を訪問するが、彼はローマで会ったときよりも太り、外見的にも以前の魅力が失われていた。また、イタリアにおいてイタリア美術は、それに詳しいミス・ウィンチェルシーとスヌークス氏を接近させる役割を果たしていたが、皮肉なことに、ファニーと結婚して変わってしまった彼は、イタリアの画家の名前を半数以上も忘れていた。彼はもはやミス・ウィンチェルシーに対して未練などまったくなく、彼女が訪ねてきた本当の意図にも気付かない。そして不思議なことに、ミス・ウィンチェルシー自身も、再会した彼に対して魅力を感じなくなっているのである。

Ⅳ

“Miss Winchelsea’s Heart” のミス・ウィンチェルシー、女友達二人（ファニーとヘレン）そしてスヌークス氏は教職に就いており、言わばこの四人は同業者だが、イタリアへ行かなければ、彼女たちとスヌークス氏が出会う機会はなかっただろう。また、出身地が異なる “The Ring Finger” のミス・ケリンとライトンについても同じことが言えるだろう。母国語以外の言語が使用される異国において、同じ言語を使用する者同士に連帯感が生まれやすいことは容易に想像できるが、この二作品においても、イタリアが、新たな人間関係を形成する機会を提供する場として機能していることは間違いない。当時のイギリス人の根底にあったと考えられるイタリアと解放のイメージに、自国を離れた旅ならではの解放感も加わり、自国ではありえないような出会いや、展開が可能となるのである。

そしてこの二作品の魅力は、やはり意外性のある展開にあるのではないだろうか。“The Ring Finger” におけるミス・ケリンとライトンの微妙な関係性と、二人が結び付かず、ミス・ケリンが一方的に傷付いて終わるということについては、「〈大ブリテン〉に呑み込まれ、イングリッシュネスを内面化させざるをえなかった、北アイルランドのアレゴリーとして読むことができる」(200) という石田美穂子の解釈に納得させられる。

また、“Miss Winchelsea’s Heart” で、ミス・ウィンチェルシーは、スヌークスという名前をどうしても受け入れられず、自ら彼の愛の告白を断っておきながら、長らく彼のことを諦めきれずにいるばかりか、ファニーとの結婚後も、彼がいつまでも自分のことを愛しているはずと信じて疑わない。つまり、イタリアでの恋の思い出を引きずり続けているわけだが、物語の最後でようやく現実を見つめることができるようになり、イタリアでの思い出と現実を切り離して考えられるようになる。

過去におけるイタリアでの恋の思い出を 20 年間も忘れられずにいたイギリス人女性は、フォースターの短編小説 “The Eternal Moment” に登

場する。ミス・レイビー（Miss Raby）は、20年前にヴォルタ[4]の山上で、若いイタリア人のポーターから突然プロポーズされた。彼女は因習に従い、「金切り声をあげ、失礼なことを言わないで」（*EM* 155）と言って即座に彼を拒絶し、自分の行いを、「若いレディとして当然の振る舞い」（*EM* 155）と言うのだが、この経験は彼女にとって忘れがたい「永遠の瞬間」となったのである。

ミス・レイビーが、ヴォルタを舞台に "The Eternal Moment" と題した小説を書くと、幅広い読者層の間で大ヒットし、この小説の読者が続々とヴォルタを訪れたので、ヴォルタは一気に観光地化する。そして、20年ぶりにヴォルタを再訪したミス・レイビーは、かつて自分に愛の告白をしたイタリア人男性フェオ（Feo）と再会するが、やはりこの再会も、女性側の期待を完全に裏切るものとなる。見た目も性格も変わってしまったフェオに、ミス・レイビーは絶望的な気持ちになるのだ。しかし、同時に20年前の記憶が鮮明によみがえり、自分が彼に恋していないのはたった今のことであり、あの山での出来事は自分の人生における最も重大な瞬間だったことに気付くのである。このことにより、ミス・レイビーが長らくとらわれてきた「永遠の瞬間」は、20年の時を経てようやく終わったのであり、ミス・ウィンチェルシーの場合と同様に、イタリアでの特別な思い出と現実が切り離されたのである。

V

本論文で取り上げた三つの短編小説は、それぞれが異なる作家によって書かれたものではあるが、興味深いことにどこか似通った印象がある。それには、イタリアという場を共通の舞台としていること、そして、イタリアと解放のイメージが根底にあることを前提として物語が語られ

4　イタリア国境に近いオーストリア領の架空の村。イタリア語が公用語であるこの村のモデルはCortina d'Ampezzoであることから、作品の舞台はほぼイタリアと言えるだろう。

ていることも深く関係しているだろう。三作品には、本論文の冒頭に示した長編小説に見られるようなダイナミックな展開が用意されているわけではないが、過去と現実の問題、そして恋愛をめぐる思い込みや勘違いといったデリケートなテーマが細やかに扱われているところに、短編小説ならではの魅力があると言えるだろう。

省略形

E : Gissing, George. *The Emancipated*. 1890. The Harvester Press, 1977.

RF : ———. "The Ring Finger." *Stories and Sketches*. Michael Joseph, 1938. pp.195-221.

MWH : Wells, H. G. "Miss Winchelsea's Heart." *The Oxford Book of English Love Stories*. Oxford UP, 1996, pp.147-62.

EM : Forster, E. M. "The Eternal Moment." *The Machine Stops and Other Stories*. The Abinger Edition 7, Andre Deutsch, 1997, pp.155-83.

引用・参考文献

Eliot, George. *Middlemarch*. 1871-72. Penguin, 2003.

Forster, E. M. "The Eternal Moment." *The Machine Stops and Other Stories*. The Abinger Edition 7, Andre Deutsch, 1997, pp.155-83.

———. *A Room with a View*. 1908. The Abinger Edition 3, Edward Arnold, 1977.

———. *Where Angels Fear to Tread*. 1905. The Abinger Edition 1, Edward Arnold, 1975.

Gissing, George. *The Emancipated*. 1890. The Harvester Press, 1977.

———. "The Ring Finger." *Stories and Sketches*. Michael Joseph, 1938. pp.195-221.

Lawrence, D. H. *The Lost Girl*. 1920. The Cambridge Edition of the Works of D. H. Lawrence, Cambridge UP, 2002.

Wells, H. G. "Miss Winchelsea's Heart." *The Oxford Book of English Love Stories*. Oxford UP, 1996, pp.147-62.

石田美穂子「イングリッシュネス—「南」へのノスタルジアの諸相」松岡光治編『ギッシングを通して見る後期ヴィクトリア朝の社会と文化　生誕百五十年記念』溪水社, 2007, pp.185-202.

谷本佳子「*Middlemarch* から *The Lost Girl* へ—イタリアと、解放されたイギリス人のヒロインたち—」テクスト研究学会『テクスト研究』vol.9, 2013, pp.35-48.

———「ジョージ・ギッシングの短編小説「くすり指」—女とイタリアと、男—」『イギリス文学と文化のエートスとコンストラクション　石田久教授喜寿記念論文集』大阪教育図書, 2014, pp.369-77.

———「"The Eternal Moment" における過去と現在」青山学院大学英文学会『英文学思潮』vol.90, 2017, pp.127-41.